

戸田康之さん『家の鍵』

戸田です。サインネームではこのように表します。よろしく。

今日は、家の鍵で困ってしまったことについてお話しします。それはまだ結婚する前、実家で親と同居していた頃にあった出来事です。

大学生の頃、友だちと飲みに出かけたりして帰宅が遅くなる時には家の鍵を持って出ます。私が帰るより先に両親が寝てしまうことも当然ありましたが、そういう時は鍵はかけてもチェーンは絶対にかけないようにいつも頼んでいました。チェーンをかけられてしまうと家に入れません。今はU字の金具を使ったロックですが、当時はチェーンを引っかけるタイプでした。家には帰ってくるから、鍵だけかけてチェーンはしないようにと念を押してから出かけていました。

2月のある日、友だちと飲みに行くことになり、両親に、やはり同じように頼んでから出かけました。さんざん飲んで終電で帰宅。夜中の1時頃だったでしょうか、千鳥足で家まで帰り、入ろうと鍵を開けてドアを引いたところチェーンがかかっている開きません。何とか手で外そうにも外れませんし、壊す工具もありません。家の中は真っ暗で、両親は2階の寝室で寝ているようでした。インターホンを押すと中でパトランプが光るようになっていますが、置いてあるのは1階。両親の寝室にはありません。両親は耳が聞こえないので何度押したところで起きるわけがありません。困り果ててしまいました。

2階を見ると、両親の寝室の雨戸は閉じられておらずガラス窓だけの状態でした。ならば、懐中電灯を持って2階に上がり、窓の外から中を照らせば起きてくれるかもしれないと思いつき、懐中電灯を探しに外の物置をあさってみましたがありませんでした。

どうしようかと考えていたとき、近くに交番があることを思い出しました。交番に行けば懐中電灯があるはずだと思い、交番に行って、耳が聞こえないことを伝え、筆談で懐中電灯を貸してほしいと警察官にお願いしました。警察官は怪訝な顔で、なんで懐中電灯なんか借りたいんだと聞くので、必死に事情を説明しました。両親も聞こえないのでインターホンは聞こえずチェーンがかかっている家に入れず、懐中電灯で寝ている両親を照らせば起きてくれるかもしれないので借りたいのだと言いました。それでも警察官は半信半疑の反応でしたが家までついていくと言うので、自宅まで一緒に行きました。

インターホンを押しても反応はなく、親は2階で寝ているので懐中電灯をどうしても使いたいと頼むとやっとわかってくれました。貸してくれた懐中電灯は大きくて光も強力でした。それを持って2階までよじ登り、寝室の窓から中を覗き込むと窓際に寝ている父が顔をこちらに向けて寝ているのが見えました。

母は奥にいたので父を起こす方がいいと考え、懐中電灯で顔めがけて必死に照らしましたが熟睡していて起きる気配がありません。奥で寝ている母は少し遠かったのが気づいてくれるか不安でしたが、今度は母めがけて照らすと、しばらくして母がどうにか目を覚ましてくれました。自分がいることを伝えようとしたが母は顔に当たる光が眩しくて見えないと言うので、慌てて懐中電灯を自分に向けました。母は、私を見てもうびっくりです。慌てて窓を開けてどうしたのかと聞くので、あれだけチェーンをかけないように言ったじゃないかと言うと、母は私にも警察官にも平謝りですぐに玄関のドアを開けてくれました。

警察官には丁重にお礼を言って懐中電灯を返し、なんとか無事に家に入ることができました。もし誰も起きてこなかったら、2月の極寒の時期に凍死してしまっただけかもしれません。

その後は、同じことを繰り返さないよう、遊びに行く時には必ず「チェーン禁止」と書いた紙を玄関ドアの内側に貼るようにしていて、それ以降チェーンをかけられることはなくなりました。